

# 言葉、 そして 文章とは

『暮しの手帖』編集長

松浦弥太郎

『暮しの手帖』が、言葉とは何か、と考  
える時、それは文章ということになる。  
言葉のつらなりによる文章で、いかに  
雑誌として伝えたいことを、読者に届け  
るのかを毎日考えている。  
編集部では、よくこんなことを話し合う。  
文章の上手い下手があるけれど、さて、  
上手い文章とはそれだけ言いたいことが  
しっかりと伝わる文章なのか。そしてま  
た、下手な文章とはそれだけ何も伝わら  
ないのかと。

「学校で教わるような上手い文章を習得  
した人の文章って味気なくてつまらない  
と思う。確かにそこには正しい文法によっ  
て正しい内容が述べてあるかもしれない  
けれど、読んでいて心が動かされないん  
です」と、一人の編集部員が言った。

「たとえば、イギリスにおける演説では、  
滑らかで上手な人ほど信用されず、逆に、  
たどたどしくも一生懸命伝えようとして、  
どもったり、何度も同じ言葉を繰り返し  
たりするように、心の込められた演説の  
ほうが、人は耳を傾け、信用をして聞く

文章が短かろうと長かろうと関係なく、  
紙芝居を作るのだ。

さあさあみなさん、こちらをどうぞご  
覧になってください。こんな話があります。  
紙芝居はそんな風に始まる。何が始ま  
るんだろう、早く次の一枚をめくって  
くださいと思わせるような最初の一枚でな  
ければいけない。その一枚には何が必要  
なのだろう。二枚目をめくる。実はこう  
いうことがありまして……というように。

わあ、おもしろい、と思ってもらえる  
ように紙芝居を作る。そしてまた、早く  
次の一枚を見たいと思ってもらえるよう  
に工夫をする。

要するに紙芝居というのは、文章を書  
く上でのプロット（物語の枠組み、構成）  
に代わるようなものだ。

自分が言葉で伝えたいことがあるなら、  
A4サイズの紙でよいので紙芝居を作っ  
てみて、それをまずは自分で眺めて観客  
になってみる。そして本当におもしろい  
かどうかをよく考える。

たとえば、道ばたでその紙芝居をやっ

と言うけれど、それと同じではないかな」  
と、他の編集部員が言った。

僕はいつも編集部員にこのように話し  
ている。

「文章を書く際には、決して上手に書  
こうと思わないでください。文章とい  
うのは上手であれば上手であるほど伝わ  
るものが伝わらなくなるからです。例え  
ば、あなたが自分より何も知らない年下  
の妹や弟に、少し難しいことを説明した  
り、見たこと聞いたことを伝えようとす  
る時、どのように話しますか。横に座っ  
てやさしく話しかけるように、その様子  
を想像しながら文章を書いてください」。

てみたときに、子どもから大人までが足  
を止めてくれるかどうか。紙芝居がおも  
しろいと確信したら、そのまま言葉を足  
して文章を膨らませていけばいい。おも  
しろくなければ、紙芝居を何度でも作り  
なおせばいい。

そうすると、子どもにも大人にもわか  
りやすい言葉を使った文章には、何が大  
切なのかがよくわかるだろう。

そう、文章には、はじまりとまんなか、  
おわりが明確であり、具体性と、親切で  
ていいねい、そしておもしろさが必要なのだ。  
言葉とは、そして文章とは。

そしてこうも言う。

「すべての文章をあなたが愛する大好き  
な人に向けたラブレターとして書いてく  
ださい。そう思いながら言葉を選んでく  
ださい」と。

そういった人を思いやった心持ちを大  
切にしながら、それぞれが自分の言葉を  
使って文章を書くことによって『暮しの手  
帖』は出来上がる。

文章を書くにはコツがあるのでですかと  
よく聞かれる。

文章を書くときにいつも意識している  
のは、読んだ人が、その文章を読みながら、  
いかに書かれたものをビジュアル化でき  
るかである。要するに、言葉と文章を使っ  
て、どれだけ具体的に情景を浮かばせら  
れるかということだ。

たった一行の文章でも、相手の頭のな  
かに何かしらのビジュアルが思い浮かぶ  
かどうか、書き手としての腕のみせど  
ころと思っている。

そのための下準備として、僕はこんな  
ことを行っている。

いかに賢くならず、いかに上手になら  
ないようにと心掛けることが、僕にとっ  
て最も大切なことである。

文章を書いた後に、必ず確認すること  
がある。

それは文章を声に出して読んでみるこ  
とだ。先に述べたように、あたかも隣に  
座っている誰かに話しかけるように読ん  
でみる。リズムは心地良いだろうか。使  
う言葉は不親切ではないだろうか。説明  
に過不足はないだろうか。話しながらも  
自分が相手の気持ちになって、聞く意識  
も持つことだ。そうすると、直すべきと  
ころが必ずわかる。

最後に参考として、**花森安治**（※）が残  
した実用文十訓を記しておきたい。

- 1、やさしい言葉で書く。
- 2、外来語を避ける。
- 3、目に見えるように表現する。
- 4、短く書く。
- 5、余韻を残す。
- 6、大事なことは繰り返す。
- 7、頭でなく、心に訴える。
- 8、説得しようとしな（理詰めで話をすすめない）。
- 9、自己満足しない。
- 10、一人のために書く。

松浦弥太郎  
まつら や たろ

1965年東京都生まれ。『暮しの手帖』編集長、文筆家、書店店主。92年、オールドマガジン専門店「m&co.booksellers」を開業。2000年、トラックによる移動書店「m&co.traveling booksellers」を始め、02年、「COW BOOKS」を開業。書店を営む傍ら、執筆や編集活動も行う。06年、雑誌『暮しの手帖』編集長に就任。『即答力』（朝日新聞出版）など著書多数。

※花森安治(1911-1978)

編集者、グラフィックデザイナー。敗戦後、日本の暮らしを見つめる生活雑誌『暮しの手帖』を創刊し、30年間編集長を務めた。